

# 自然と造形の調和する「美しいまち」づくり（井川町）

200種・2000本の桜を有する井川町の「日本国花苑」。40haに及ぶ広大な敷地と自然景観に恵まれた苑内に、10年の歳月をかけ彫刻作品を展示するプロジェクトは、県内でも他に類を見ない文化的事業として内外の話題となっています。

「桜の名所」定着と

その後の周辺整備

も及びました。この広大な敷地には、町内のみならず町外からも人々が訪れ、四季を通じての憩いの場となっています。

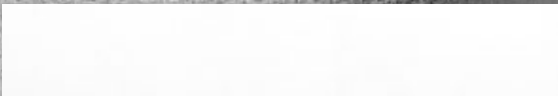
駅開設記念の「母子像」がコンクリールのきっかけに

国花苑の整備事業が一段落したのち、町ではこの苑内の自然景観を生かしつつ、町目指す「美しいまち、楽しいまち、健康なまち」づくりのシンボルと位置付ける何かを模索していました。

平成7年、「桜」にちなんで名付けられた、同町の玄関となる「JR井川さくら駅」が開業します。長年の住民の願いであったこの駅は、本県では昭和40年「北大曲駅」以来30年ぶりに誕生した新駅です。駅の反対側には、「パークアンドライド」のための広い

大賞：荻野弘一「桜の木の下で（電車ごっこ）」  
実物は高さ2m、重さ2tにも及ぶ巨大なもの。作者の希望で苑内の「チビッコ広場」（左）に設置されました。

昭和47年にオープンした「日本国花苑」は、日本各地から集められた名桜200種・2000本が植樹された、郡内随一の桜の名所。中には希少種もあり、学術的にも貴重なこの公園では、当時町民の手により植えられた木々が30年近く経過した今立派に成長し、個性あふれる彩りを競い合っています。





応募作品を審査する審査員。高いレベルの作品群に審査は難航。写真中央が秋山氏。(写真提供：井川町)

好条件の設置場所に  
予想を上回る出品数

駐車場が整備されており、そこに隣接した公園には開設記念として彫刻家・秋山沙走武氏(故人)の製作したブロンズの「母子像」が飾られています。

「彫刻」町ではこの文化の薫り高い芸術をシンボルとすることを構想します。しかし美術品は高額、しかも広大な敷地には数量も必要です。当時、秋山氏に苑内に彫刻を設置するアイデアを尋ねると、「全国に公募してみたら？」との答え。この一言がコンクール実施のきっかけとなりました。

実施に向け町内の個人・企業の寄付、町の持ち出しを合わせ開催資金を調達。計画では、大賞1点、優秀賞2点、準賞5点中1点の計4点を毎年苑内に設置、これを10年間の実施で徐々に増設していきます。選考は4名の専門家が行い、設置される4点のうち準賞作品については、一般公開時の鑑賞者投票「町民賞」により1点を決定します。

コンクールの名称は「桜の森彫刻コンクール」。美術館やギャラリー、教育機関、専門誌等に宣伝を図ったところ、背景として絶好の、自然環境に恵まれた広大な苑内に展示できるとあって、応募は町の予想を遥かに越えた252点。審査会場となった農村環境改善センターは、模型だらけで足の踏み場もないほどいっぱいになりました。

次世代の子どもたちに  
豊かな文化と創造力を

模型作品の一般公開には約1,000名の町民が訪れ、各地で活躍する彫刻家たちが



審査会場となった農村環境完全センターに所狭しと並べられた応募作品。(写真提供：井川町)

ら応募された、全国レベルの作品に対する関心の高さをうかがわせました。

入賞作品は、国花苑の「さくらまつり」の開始に合わせて、この4月28日に序幕・展示されます。また、この日は同時に、子どもたちを対象としたワークショップも開催されます。「石ころたちの動物園をみんなでつくろう」というテーマで、大賞・町民賞を受賞した2人の彫刻家が講師となり、石ころを動物に見立て、ペイントしたものを苑内に展示するイベントです。

この子どもたちの創造力を養うワークショップは、同コンクール事業の一環として今後も続けられます。

こうした取り組みは、次世代を担う子どもたちの感性を育み、豊かな創造性で将来のまちづくりに貢献するものと期待されています。

また、今後の作品を含めた国花苑の維持管理について、町では桜愛護等のボランティア組織の活動に期待を寄せています。町民と行政が一体となった「美しいまちづくり」を目指し、同事業は町の目標へ向けた新しいスタートとなっています。



実制作され展示された受賞作。  
優秀賞：丸山勝「縄文文様 薫風」(上)  
優秀賞：石谷孝二「森の風」(中)  
町民賞：笠原幸生「舞い降りた月」(右)